

# 天理教の後継者問題

岡 田 芳 来

最近の朝日新聞に「長男・新時代」のタイトルで、企業一家の徹底した後継者教育問題が掲載されている。

その中で、精神科医の斉藤茂太氏は、長男の特徴的な性格として、「すばしこくはないが、慎重で、控え目、失敗を恐れる、職業の適性からいうと、管理職が向く」という。

又、三年ほど前、一流企業五十五社の社長の兄弟順次を調べた結果は、長男は約半数。ことに銀行の頭取に目立つとあり、それに対して、斉藤氏は「ち

やらんぼらん」でなく手堅い。まさに長男の性格にピッタリ」とも言う。

日本青年会議所の新会頭になつた、麻生セメント社長の麻生太郎氏は、故吉田茂元首相の孫に当ることとは有名であるが、彼は、幼いときから厳しい長男教育を受けてきたことでも知られている。

本人の言うには「小学校三年まで私塾で教育された。大学に入るまでは飯も麦であつた。弟は国産の新車、妹は外車を与えられたのに、私だけは国産のボンコツカー。ハシのあげおろしから、人様への口

のききかたまで徹底してしごかれた。又旅行にいくんでもキップは買ひ与えられ旅館も前払いでとにかく自分の使える金は一銭もなかつた」と述懐している。

又「変化の激しい業界では同族会社といつても、息子に跡を継がせるのは難しくなつてきている。能力のないやつが跡におさまつたんじや、とてもたん。オレのところでもそうだ。息子が出来たら、敵しくしごく。それでダメなら、さつさと見捨るな」と言い切つてゐる。

一方、十代前に日本青年会議所会頭を勤めた、ウシオ電機社長牛尾治朗氏は、家業から電機事業部門を分離させ、一代でのしあがつた実力者。「やがては企業にもインゲバが起きる」などと説いて話題になつた。「暴れん坊」の次男であつたことはあまりにも有名である。

しかし、後継者問題は企業にとどまらず、天理教内でも大きな問題である。

この問題について、天理教青年会では、あらきとありより誌で「後継者問題を考える」と題して特集

を組んでゐるので、その一部を紹介してみよう。

### ◎天理教の後継者とは

後継者といふことは、教会生活においてよく言われる言葉である。しかしながら、案外この言葉を教会長の後を継ぐ者のみ指してこれを後継者と呼んでゐる場合が多いのでないか、成程、教会長の後を継ぐ者は教会長の後継者であるということには違ひがない。しかし、そうした限られた者のみが後継者と呼ばれてゐるのではない。

道（注・天理教）の次第を考えると、この道は、教祖お一人から始まつてゐる。皆が寄り集り教会の土台を作られた初代も、また、その道を引き継いで今日へと繋いでくださったわれわれの先輩方、今日の私たちも、すべてこれ、元を正せば教祖お一人から始まつてゐることは、否めない事実である。それ故、後継者という時、われわれは先ずこの教祖の道を継ぐ道の後継者であるということを自覚しなければならぬ。

つまり、教祖のおつけくくださった親神様の思召で

ある陽気ぐらしへの道を、これを受け継ぐのがわれわれ後継者なのである。

……………中 略……………

お互いは教祖の御教えを受け継ぐ道の後継者として、親神様から引き寄せられているのだという立場を改めて心に治め、常に親神様の教えの理を求め、それにお互いの心遣いや行ないを合わせてゆく足取りの中に、私たちの日々の中に、後継者としての自覚が、喜びがいやが上にも深められてゆくことである。

ところで、本教でこの後継者という言葉が使用される場合は、大別して次の三つの意味を持っているようである。

第一には、教会長のあとつぎという意味であつて、教会長後継予定者を指す場合。

第二には、親(冢)の信仰を継ぐ者という意味で、信仰者の子弟を指す場合。

第三には、教祖の後に続くものという意味で、本教信仰者の青少年層を指す場合であり、いわゆる「道の後継者」という場合である。

## 1. 道の後継者

道の後継者の目指すべきは、言うまでもなく教祖の道具衆に成人することであろう。

そのためには、まず一個の人格が形成されると共に、親神様の御教えを己の世界観人生観となすこと、換言すれば神一条の精神を培うことが要求され、更には、人だすけのための行動が必要となる。

……………中 略……………

世界なみの人間思案から脱して、いかにすれば神一条の心を己が心にするかということが、道の後継者共通の、しかも最も大きな問題といふことができるであろう。

## 2. 親の信仰の後継者

天理教祖の真筆になる「おふでさき」にをやこ(親子)でもふりふ(夫婦)のなかもきよたい(兄弟)もみなめへに心ちがうで(五・八)と教えられている。(おふでさきとは天理教原典の一つである)

親がお道の信仰をしているかといって、子供がその信仰を受け継ぐとは限らない。それは親子、夫婦

、兄弟といえども、みなそれぞれに心が違りからであり、信仰は子供に強制できるものではないからである。

ではどうすれば、子供に信仰を伝えてゆくことができるか。本教では「縦の伝道」という言葉で親から子への信仰の伝承を表現し、今日では少年会活動によって、十五才までの会員に育成の手を差しのべている。しかるに、やはり縦の伝道の上で子供に最も影響力を持つのはその親であることに変わりはない。……つまり、子供に信仰を伝えるためには、まず親が立派な信仰者であるということが要求されるのである。

ただ、親の信仰を受け継いでゆこうとする者の平均的な悩みとしては、お道の信仰を志してはいるものの、信仰的体験に乏しいところから、教理の理解はできて、それを心から信じ切ることができ難いということが挙げられるだろう。……

### 3. 教会長後継者

天理教の一般教会規程によれば、教会長の後継者の決定に関しては、

一、直属教会では、当該教会の役員及び部属教会長の推挙による。(直属教会とは、天理教本部直属の分教会・大教会)

二、部属教会では、当該教会の役員の推挙によるとなっていて、制度上は、世襲ではない。

しかし、現実には教会長の子弟、それも多くの長男が後継予定者として周囲から目され、その信仰的成人の過程にあつて徐々に本人が教会長後継者としての自覚にめざめ、当該教会長の勇退や出直し(死亡)といった事情の中で、存命の教祖のお許しを得て教会長の理を拝命するケースが多く見られるようである。(筆者)

ここで、他教団との違いは

「女松男松(めまつおまつ)のへだてない」という教義の示す通り、夫である教会長が出直し(死亡)長男が若い場合の教会の治め方として、その妻が教会長職を継ぐ場合が多い。そのため天理教の教会長には女性が多い。

その数はさだかではないが、一五〇名の大教会長

の中でも十名近い女性大教会長が就任している。一般部属教会長となると、数千名にのぼるのではないだろうか。(女性教会長の場合、教会設立当初から初代会長と、二代以下の女性教会長との二種類がある。)

しかし、新会長が男性であれ、女性であれ、「教会は、神一条の理を伝える所であり、たすけ一条の取り次ぎ場所である。その名称の理を、真によく発揚するには、ここに寄りつどうものが、ちば(天理教本部「かんろ台」のすえられている場所の意)の理に添い、会長を芯として心を一つに結び合うのが肝腎である。」

「会長の使命は、常に元を忘れずに、自ら進んで深く教の理を究め、心を治めて、道の先達となり、誠真実をもって人々を教え導くにある」

と、教会及び教会長について「教典第九章」に記されているが、こうした教会に寄り集う人々の芯となり、教会長の使命を全うしてゆくためには、高度の信仰的成人と努力が要求されるのは当然のことである。

(出統計の上から見れば、教会長の子弟(多くは長男)が教会長の後任者に決定されるのは全体の半数に満たぬ状況である。)

現在、本教で教会長の資格を得るためには、天理大学、天理高校を卒業、あるいは修養料、修養会を修了した者が、約三週間にわたる教会長資格検定講習会を修了し、教会長資格検定を受けてこれに合格して教人登録をしなくてはならない。(天理大学伝道履修者、専修料卒業者、天理高校よりほくコース履修者は直接教会長資格検定を受検することができる)この教会長になる資格を有する教人は一四九、六二二名(五一年末現在)にのぼるのであるから、この内約九名に一人が現職教会長ということになる。(つまり、教人登録された者であっても、将来教会長になる者は極めて少なく、大ざっぱな計算をすれば、教会には平均八名、教会長を後継する資格を有する者がいるわけである)。

かくして、教会長後継者と目されている青少年は、まず道の後継者として、更に親の信仰の後継者としての課題を与えられると共に、聖職者としてその

使命を全うできるだけの成人が要求されるわけで、それだけに多くの問題をかかえているといえよう。

### ◎後継者の育成について

本教では、世界一れつたすけの一翼を担う人材の育成を目指し、種々の教化、教育機関を有している。

すなわち、①信者の修養機関としての修養科、②天理教師の養成を目指す天理教本科及び専修科、第二専修科、教校附属高等学校、③学校法人天理大学（幼稚園から大学までの諸学校）、④医療よりほくの養成を目的とした天理高等看護学校、天理医学技術学校などである。更に、「布教する親たちが、その子弟教養に後顧の憂いのないように、また親に代つて、各自に与えられた徳や才能を十分伸ばせるよう、その世話どりに当たる」教内子弟の扶育、教養を目的とした天理教一れつ会がある。

こうした教化、教育機関では各々の目標に向かつて道の後継者の教育が実施されているわけであるが、これらはすべておちば（本部）において行なわれて

いる。

ちなみに、前記の教化、教育機関の課程を五一年度修了あるいは卒業した者の総数は一九、〇八八名である。

他方、地方における道の後継者の育成は、教会活動と教区活動があり、更に、婦人会、青年会、よのもと会、少年会といった会組織でも若年層の育成を各々の立場から推し進め、学生会では学生生徒の自主的な活動により相互研鑽がなされている。

以上のように、本教においては道の後継者の育成の上に様々な努力がなされているのであるが、こうした中で道につながる青少年が教祖の道具衆に成人してゆくためには、「信仰は一人一人のもの」である限り、本人の自覚と主体的な努力が何よりも待ち望まれるわけである。

ところが天理教の場合、正規の教育機関はすべて本部に集中されているため、経済的、地理的、時間的理由或いは、文化的社会的に対応し得る教団体制を研究するためにも東京に、学校法人天理大学の分校設置を熱望する声があることは事実であるが、現時

点では、各種の短期の講習会的なものしか地方には認められていない。これも教団将来の問題といえよう。

### ◎今、求められていること

今日、天理教内で後継者問題という言葉が使われる場合形の上からは主に、教会長 後任者が居ないか予定者が居ても後を継ごうとしない場合、あるいは、親の信仰を子供が受け継がない場合を指していると思われる。

その原因としては種々あるが、これを大別すると、①本人の信仰上の問題、②家庭における問題、③制度上の問題、の三つに分けることができるであろう。

まず、科学、常識といったものにとらわれて信仰に進めない、親神様のご守護を信じられない、いんねんの自覚ができない、教理に疑問を持つ、お道の価値観を持っていないといった本人の信仰上の問題が挙げられるが、人生経験に乏しい若者は誰しも一度はこうした壁につきあたるものであり、これを乗り越

えてゆくには信仰的指導者の助力や本人の努力が必要である。

ところで信仰的強さを持つためには、本人の身上事情の体験もさることながら、わけても将来教会リーダーとなるべき教会長後継予定の三代四代以降の若者に、初代教会長の様に布教体験をいかにして体感さすか、が一番の問題であろう。

次に、家（教会）の経済的な問題、親の態度、家庭の人間関係上の問題が青少年の心を痛めさす場合がある。その家庭の運営方針（家風）がまず教理に添った形で確立されなければならないということである。教会初代の布教道中は、信者のお供え以外に収入の道はない。（家族の者が職業に就く特例はあるが）したがって子供は親と共に、経済的に難行苦行の日々が続くために、初代教会長子弟の何割かは教会を継ぐことを嫌がり、逆に経済的にも恵まれた三代四代の子弟は、厳しい信仰的体験に乏しいために「信仰的たくましさ」に欠け、教会リーダーとしての弱さも生れるという問題があるろう。

更に、自分の所属する教会やその上級教会に対す

る不足や、教会長後継者の場合には、自分の置かれて  
いる立場に対する懐疑から、問題を感じるむきがある  
ように思えるが実はこうした問題は二次的なもので  
あり、本人の信仰が確立されておりさえすればいかな  
る場合にも解決の道は開かれるものである。

このように、若者が道の後継者として、親の信仰  
の後継者として、良くその立場を全うして、良くそ  
の立場を全うしてゆくには、外的要素として、良く  
師と健全な友人関係を得ること、円満な家庭にいる  
こと、正しいあり方の教会につながることなどが挙げ  
られよう。

ついで制度上の問題についていえば、現状ではか  
ならずしも総べて可といえない面がある。しかしこ  
れは長い時間をかけて改めて行く問題であろう。そ  
のためには自由に討議し民主的に運営する機関と、そ  
れを実施する寛容さが肝要である。

いずれにしても、後継者の問題は、古くて新しい  
問題であり、わけても信仰の世界においては、先人  
がいかにか立派な信仰の足跡を残し、若者は親の信  
仰をどのように受け取ってゆくか。

そのために、若者は悩み、励まし合い、己が心に  
鞭打って道を求めてゆくしかないのではなからうか。

(筆者は、天理教高東布教所長・世田谷中央  
支部副支部長・天理教道友社社友。)